

福島第一原発事故に関する原子力専門家としての情報発信

諸葛宗男

東京大学公共政策大学院

1. はじめに

福島第一原発事故の際、日本原子力学会の「異常事象説明チーム」の一員として長期間にわたりてTVのコメンテータを務め、事故進展が進行する中で専門家としての解説を求められるという、前代未聞の役割を担ったので、その経験を紹介する。

2. チーム 110 とは

中越沖地震の後、原子力委員会からの後押しがあって日本原子力学会の中に発足した異常事象解説チームのニックネーム。10人の説明者と、それを支える100人の専門家により構成されている。日本原子力学会の広報情報委員会と社会環境部会が共同して運営している。この組織が作られたきっかけは、中越沖地震の時の変圧器火災がTVで何の解説もされないまま長時間放映され続けたことだった。消火水配管の損傷のため消火できず、放置しておいても支障ないと判断して作業者は優先度が高い作業に専念していたのであるが、誰もそのことを説明しなかったため、多くの国民が不安を抱くこととなった。この出来事を教訓として、類似の事態が発生した場合、原子力施設における異常事象について専門家の見解が求められた場合に、国や事業者から独立した立場から速やかにわかりやすい解説をするため、2010年1月にチーム 110 が結成された。

3. 福島第一原発事故での初期対応

地震発生の翌日の2011年3月12日、チーム 110 の窓口を務めていた原子力学会広報情報委員長にチーム 110 発足後初めての解説者派遣要請が入った。事務局役の社会環境部会長を務めていた私にすぐ連絡があり、手分けをして対応可能な解説者を探した。交通機関の乱れで帰京できない人、所属組織の施設対応で身動きがとれない人が多く、登録していた10人の解説者の中で対応可能な人だったのは、たった1人であった。仕方なく、新規の解説者選定を行うこととし、大学に当直で詰めていた先生1人を確保した。その後、T局から解説者の派遣要請が入ったが、派遣できる解説者がいないため、事務局の私自身で引き受けることとした。

4. 専門家のサポートチーム編成

チーム 110 であらかじめ準備していた100人のサポートチームは、核燃料、再処理、廃棄物、核融合と言った専門分野別に編成していたが、今回の事故のような広範な事態に対応できるものではなかった。そのため、急きよ福島第一原子力発電所の研究、設計、建設、運転等に係った経験があるシニアの人達、約30名により、福島第一事故の分析を行う専門家チームを発足させ、チーム F と名付けた。

5. 事故情報の分析

チーム F は事故後、連日100超のメールで事故情報の分析・評価を行った。この膨大な分析情報が派遣された解説者を支えていた。官邸やエネ庁に詰めていた多くの専門家にほとんど情報が入らなかつたことと大きなかい離があつたことは特筆すべきことである。